国道バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成３年度

1992.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

(1)　鴨部・川田遺跡出土の土偶

(2)　鴨部・川田遺跡全景

(1)　六条・上所遺跡出土の韓式系土器

(2)　前田東・中村遺跡出土の注口土器

例　　言

1　本書は，高松東道路建設に伴い平成３年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。

2　本調査は，建設省四国地方建設局からの委託をうけ，香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3　本年度の調査組織は，次のとおりである。

総括	所　長	松本　豊胤			
	次　長	安藤　道雄			
総務	係　長	加藤　正司（平成３年５月31日まで）			
	係　長	土井　茂樹（平成３年６月１日から）			
	主　査	山地　　修（平成３年５月31日まで）			
	係　長	今田　　修（平成３年６月１日から）			
	主任主事	黒田　晃郎			
調査	係　長	大山　真充			
（発掘）	主任技師	土佐　修治	（整理）	技　師	森下　友子
	主任技師	大久保徹也		技　師	蔵本　晋司
	技　師	市村　拓二		技　師	宮崎　哲治
	技　師	古野　徳久			
	調査技術員	稲毛　裕美（平成４年１月31日まで）			
	調査技術員	瀬岡　博隆			

4　調査にあたっては，次の機関や方々の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬省略）

建設省四国地方建設局香川工事事務所，志度町教育委員会事務局，香川県警志度警察署，前田東町自治会，五分一池水利組合，寺池水利組合，末西自治会，末東自治会，末南自治会，高松市鶴尾出張所，鶴尾地区連合自治会，上天神南部自治会，沖池水利組合，安西正一，黒川顕一，山田章，安部義雄，山下博士，長町聰，田渕喜市，田渕定彦

5　本書の執筆は各遺跡の調査担当者が行い，編集は大山が担当した。

6　本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。

ＳＨ　竪穴住居	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＤ　溝	ＳＲ　自然河川
ＳＥ　井戸	ＳＫ　土坑	ＳＰ　ピット	ＳＡ　柵
ＳＦ　窯	ＳＸ　性格不明遺構		

7　挿図の一部は，国土地理院地形図（１／25,000，１／50,000）を使用した。

本　文　目　次

I　平成３年度発掘調査概要……1

II　整理業務の概要報告

1．東山崎・水田遺跡……5

2．林・坊城遺跡……7

III　発掘業務の概要報告

1．六条・上所遺跡……9

2．前田東・中村遺跡……12

3．鴨部・川田遺跡……23

4．末３号窯跡……35

5．上天神遺跡……37

挿図・表・写真目次

（平成３年度発掘調査概要）

第１図　遺跡位置図……３・４

第１表　平成３年度調査一覧表……２

第２表　高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査年度別一覧表……２

（東山崎・水田遺跡）

第１図　備前焼大甕実測図……６

写真１　遺物写真撮影風景……６

（林・坊城遺跡）

第１図　縄文土器実測図……８

第２図　弥生土器実測図……８

写真１　諸手鍬……８

写真２　整理作業風景……８

（六条・上所遺跡）

第１図　遺跡周辺地形図……９

第２図　Ｇ１南遺構平面図……10

第３図　遺物実測図……10

写真１　Ｇ１南区全景……11

写真２　ＳＫ02土器出土状況（Ｇ１南区）……11

写真３　ＳＨ01土器出土状況（Ｇ１南区）……11

写真４　韓式系土器出土状況（Ｇ１南区）……11

（前田東・中村遺跡）

第１図　遺跡周辺地形図……12

第２図　Ｃ５区遺構平面図……14

第３図　Ｄ・Ｅ区遺構平面図……15・16
第４図　前田東・中村遺跡地区割り図…15・16
第５図　遺物実測図……17
第６図　遺物実測図……18

第１表　掲載土器一覧……18

写真１　Ｃ５区全景……19
写真２　弥生時代の円形の溝（Ｃ５区）19
写真３　溝内土器出土状況……19
写真４　井戸（ＳＥ01，Ｃ５区）……19
写真５　井戸（ＳＥ02，Ｃ５区）……20
写真６　縄文時代から弥生時代の川跡
（Ｄ５・６区）……20
写真７　注口土器出土状況……20
写真８　ＳＤ12土器出土状況
（Ｄ３区）……20
写真９　川跡と掘立柱建物（Ｄ３区）…21
写真10　井戸（Ｄ３区）……21
写真11　掘立柱建物（Ｅ６区）……21
写真12　作業風景（Ｃ５区）……21
写真13　方形区画の溝と掘立柱建物……22
写真14　軒平瓦と五輪塔出土状況……22
写真15　五輪塔出土状況……22

（鴨部・川田遺跡）
第１図　遺跡位置図……23
第２図　２区土層断面図……23
第３図　１区遺構配置図……24
第４図　２・３・４区遺構配置図…25・26

第１表　石器主要器種組成表……31
第２表　木製品主要器種一覧表……33

写真１　２区土層断面……24
写真２　環濠内部全景……27
写真３　環濠断面……28
写真４　環濠遺物出土状態……28
写真５　円形柱穴列……28
写真６　楕円形柱穴列……29
写真７　長方形柱穴列……29
写真８　竪穴遺構……29
写真９　壺形土器……30
写真10　壺形土器……30
写真11　甕形土器……30
写真12　石包丁各種および未製品……31
写真13　磨製石矛……32
写真14　不明木製有刻円盤……33
写真15　木製鍬未製品第１工程……34
写真16　木製鍬未製品第２工程……34
写真17　木製鍬未製品第３工程……34
写真18　木製鍬未製品第４工程……34
写真19　木製鍬未製品第５工程……34
写真20　木製鍬……34

（末３号窯跡）
第１図　遺跡周辺地形図……35
写真１　灌木伐開後遠景……36
写真２　窯床面検出状況……36
写真３　煙道部横断面……36

（上天神遺跡）
第１図　遺跡位置図……37

写真１　調査区全景東から……38
写真２　作業風景西から……38

I　平成３年度発掘調査概要

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は昭和62年度から開始し，本年度で５年目を迎えた。

発掘作業は，上天神・前田東間では３遺跡を対象に実施した。六条・上所遺跡は870㎡を発掘し，古墳時代前期の韓式系土器を検出するなど，狭い面積の調査にもかかわらず大きな成果をあげることができた。なお，本遺跡の発掘は本年度ですべて完了した。

前田東・中村遺跡は4,705㎡の発掘を行った。本年度の発掘箇所は当初遺構面が２面あるとの予想であったが，果樹園の造成により上面の遺構は攪乱を受けていたため，調査期間が４ヵ月短縮された。発掘では弥生時代から近世までの溝や掘立柱建物などを検出した。本年度調査で特筆すべきことは，旧河道で縄文時代後期の遺物包含層を検出し，多数の土器を得たことである。本県は縄文時代の遺跡が少ない地域であり，高松平野において後期の遺跡が見つかったのは初めてのことであり，今後縄文研究に寄与するところが大きいであろう。なお本遺跡の調査は一箇所(1,620㎡）を来年度以降に残すのみになった。

上天神遺跡は前田東・中村遺跡の調査が短縮されたことに伴い調査に着手したもので，古川以西の1,900㎡を発掘し，来年度も継続する予定である。

次に，三木・津田間の発掘作業は，２遺跡を対象に実施した。

鴨部・川田遺跡は弥生時代前期の環濠集落であり，昨年度からの継続調査として本年度は集落の中心部分7,000㎡の発掘を行った。調査の結果環濠の内外で竪穴住居，平地住居，土坑等の多くの遺構を検出した。また環濠からは多数の土器や木製品が出土した。特筆すべき点は，木製鍬製作の一連の工程を示す資料が得られたことと，この時期には珍しい土偶が出土したことである。なお，本遺跡の発掘は本年度で完了した。

末３号窯跡は古墳時代後期の須恵器窯跡で，窯本体１基と灰原及びその周辺の3,439㎡を発掘した。灰原は溜め池の中にまで広がっているため，来年度以降この部分の500㎡の調査が残ることになる。

整理作業は，本年度から開始することになり，東山崎・水田遺跡と林・坊城遺跡の２遺跡の整理，報告書作成作業に着手した。

東山崎・水田遺跡は，調査面積25,400㎡で，昭和63年度に発掘を行なったものである。この遺跡は中世末から近世にかけての豪農の屋敷跡が中心となり，この時期の陶磁器類が多く出土している。整理作業は本年度に完了し，報告書の刊行は来年度の予定である。

林・坊城遺跡は，調査面積29,200㎡で，昭和63年度に発掘を行なったものである。この遺跡は縄文時代晩期から中世にいたる遺跡であるが，自然河川からは縄文時代晩期の木製農耕具が出土するなど学術的に貴重な内容をもっている。整理作業は８月から３月までの８ヵ月間行い，遺物

の洗浄・注記・復元及び実測を行なった。なお作業は来年度にも継続して実施する予定である。

	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
発掘	六条・上所	高松市六条町	870㎡	4. 1～5. 7	古野・市村・稲毛
	前田東・中村	高松市前田東町	4,705㎡	5. 8～11. 30	古野・市村・稲毛
	鴨部・川田	志度町鴨部川田	7,000㎡	4. 1～1. 20	大久保・土佐・満岡
	末3号窯跡	志度町末	3,439㎡	12. 1～3. 31	古野・市村・稲毛
	上天神	高松市上天神町	1,900㎡	1. 21～3. 31	大久保・土佐・満岡
整理	東山崎・水田	高松市東山崎町	—	4. 1～3. 31	森下・蔵本
	林・坊城	高松市林町	—	8. 1～3. 31	宮崎
合計			17,914㎡		

第1表　平成3年度高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧表

項目	区分		発掘業務					整理業務
遺跡名称		調査総面積	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	次年度以降	
上天神・前田東間	上天神遺跡	24,800	5,000	12,600	0	0	1,900	5,300	
	太田下・須川遺跡	25,000	0	0	24,170	830	0	0	
	林・坊城遺跡	29,200	0	29,200	0	0	0	0	平成3年度実施・継続予定
	六条・上所遺跡	31,180	0	30,310	0	0	870	0	
	東山崎・水田遺跡	25,400	0	25,400	0	0	0	0	平成3年度実施
	前田東・中村遺跡	34,300	0	16,170	9,320	2,485	4,705	1,620	
三木・津田間	鴨部・川田遺跡	12,000	0	0	0	5,000	7,000	0	
	末3号窯跡	3,939	0	0	0	0	3,439	500	
総計		185,819	5,000	113,680	33,490	8,315	17,914	7,420	

第2表　高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査年度別一覧表

上天神遺跡
林・坊城遺跡
六条・上所遺跡
東山崎・水田遺跡
前田東・中村遺跡
末3号窯跡
鴨部・川田遺跡
志度町
1:50,000

第1図　遺跡位置図

II　整理業務の概要報告

東山崎・水田遺跡

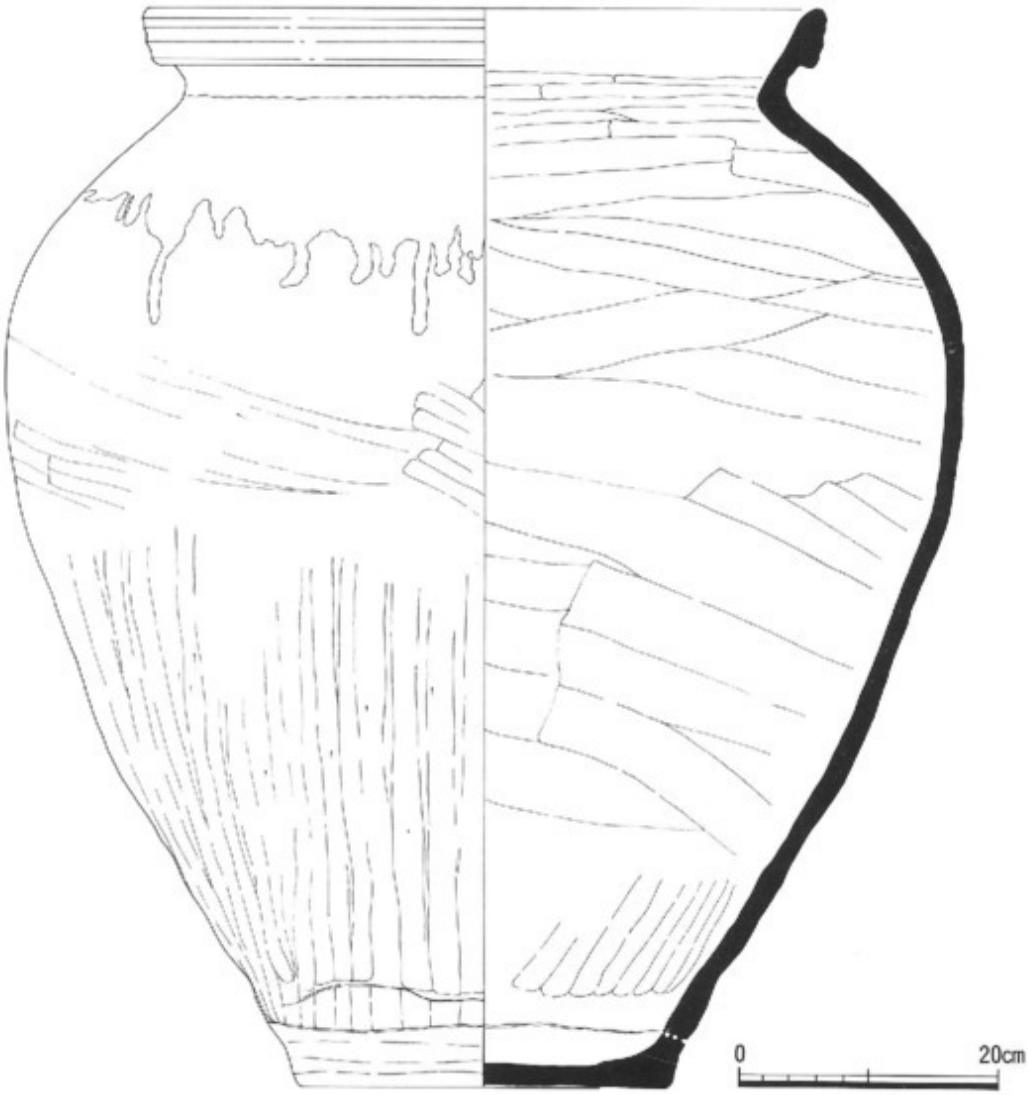
1．整理作業の概要　東山崎・水田遺跡は，高松市東山崎町に位置する。高松東道路の建設に伴い，昭和63年10月１日から平成元年３月31日までの６ケ月間をかけて，面積25,400㎡を対象として調査を実施した。遺跡は，新川と春日川にはさまれた沖積平野上に位置し，標高約8.5mを測る。発掘調査によって，鎌倉時代から江戸時代初頭にかけての集落遺跡であることが判明した。特に室町時代後半～江戸時代初頭の遺構には，幅約４m，深さ約1.5mの方形に巡る濠に囲まれた屋敷地が検出され，在地産の土師質土器類以外にも，中国産の陶磁器や肥前産の染付，瀬戸・美濃産の施釉陶器，備前焼などの搬入された陶磁器類が多量に出土した。建物規模や出土遺物の内容から，有力農民の屋敷跡であったと推定される。また濠の中からは，漆椀や下駄，櫛，手斧の柄などの木製品も豊富に出土し，当時の生活文化の水準を伺うことができる貴重な遺跡であると評価される。

報告書作成は，２名の職員が担当し，コンテナ約260箱の出土遺物の注記復元，合計約1500点の土器・石器・木器・金属器の実測図化と写真撮影などを行い，本年度末の終了予定である。また，依頼・委託等については，木製品の樹種鑑定82点，獣骨種別鑑定75点，石製品材質鑑定23点，木製品の保存処理32点を実施した。

なお報告書の刊行は，平成４年度の予定である。

2．作業工程表

作業内容　　月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
注記・復元	―	―										
遺物実測・検討		―	―	―	―	―	―					
遺物写真撮影									―			
報告書図版作成						―	―	―	―	―	―	
まとめ，原稿執筆，編集							―	―				



第１図　備前焼大甕実測図（Ｓ＝1/6）

写真１　遺物写真撮影風景

林・坊城遺跡

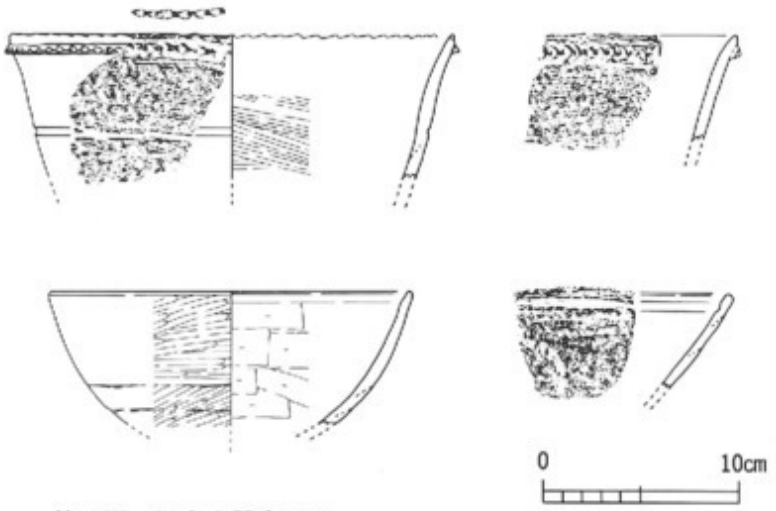
1．整理の概要

林・坊城遺跡は，高松市林町に位置する。高松東道路の建設に伴い，昭和63年４月から昭和63年11月までの８ヶ月間をかけて，面積29,200㎡を対象として調査を実施した。遺跡は８ｍほどの複数の微高地と，微高地間の低地部分を流下している自然河川にまたがって所在し，縄文時代晩期から近世までの遺構・遺物が確認できた。後世の削平を受けているために遺構の遺存状態はあまりよくない。出土した遺物は，土器・石器・木製品等あわせてコンテナ120箱分である。自然河川から出土した縄文晩期の凸帯文土器と，円形周溝状遺構から出土した弥生時代後期の供献土器が大半を占める。なお，特筆すべき遺構としては，弥生時代後期の円形周溝状遺構，遺物としては縄文時代晩期の木製農耕具類（諸手鍬・えぶり等），同時期の凸帯文土器，弥生時代後期の供献土器群等がある。とりわけ縄文時代晩期の木製農耕具類の出土は，稲作開始の時期のみならず弥生時代開始の問題とも関連する意義深いものである。

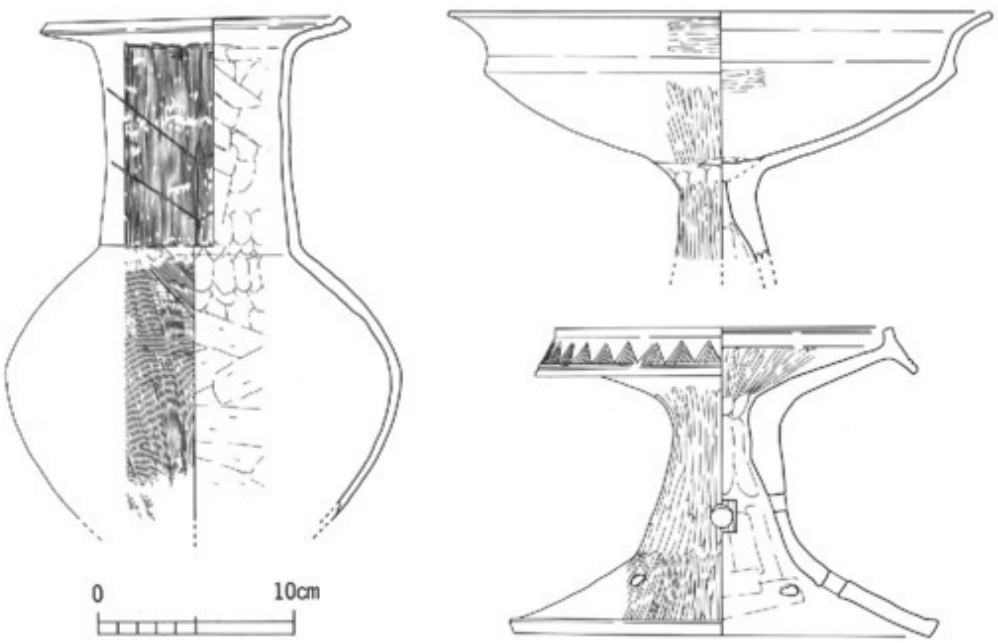
本年度は，平成３年８月から，図面・写真類の分類整理，遺物の選別・台帳作成等の基礎的整理および，土器を中心とした遺物の実測作業（約2,100点）を実施した。これらと並行して樹種同定・木製品の保存処理を委託した。来年度は，整理作業を平成４年９月まで継続する予定で，出土遺物の分析，原稿の作成を中心とした整理作業を進めるとともに，プラントオパール分析・花粉分析などを実施し，自然遺物の分析をとおした環境復元作業も進める予定である。なお，報告書の刊行は平成５年度を予定している。

2．作業工程表

作業内容	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
水洗・注記・復元	———	———	———	———				
遺物実測・拓本	———	———	———	———	———	———	———	———
原稿執筆				———	———	———	———	———



第1図　縄文土器実測図



第2図　弥生土器実測図

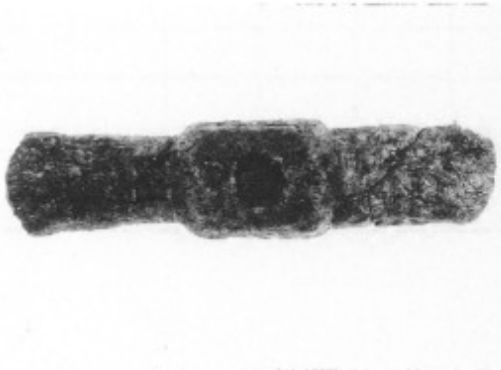


写真1　諸手鍬

写真2　整理作業風景

III　発掘業務の概要報告

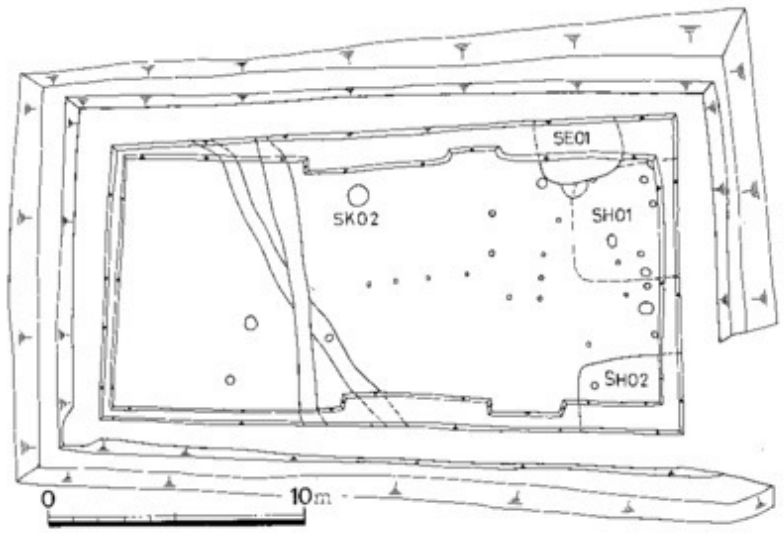
六条・上所遺跡

六条・上所遺跡の所在する高松市六条町は高松平野のやや東寄り，春日川に古川が合流する平地に所在する。その地名は条里にちなみ，山田郡の東端を一条としてそこから六条にあたる地と考えられている。

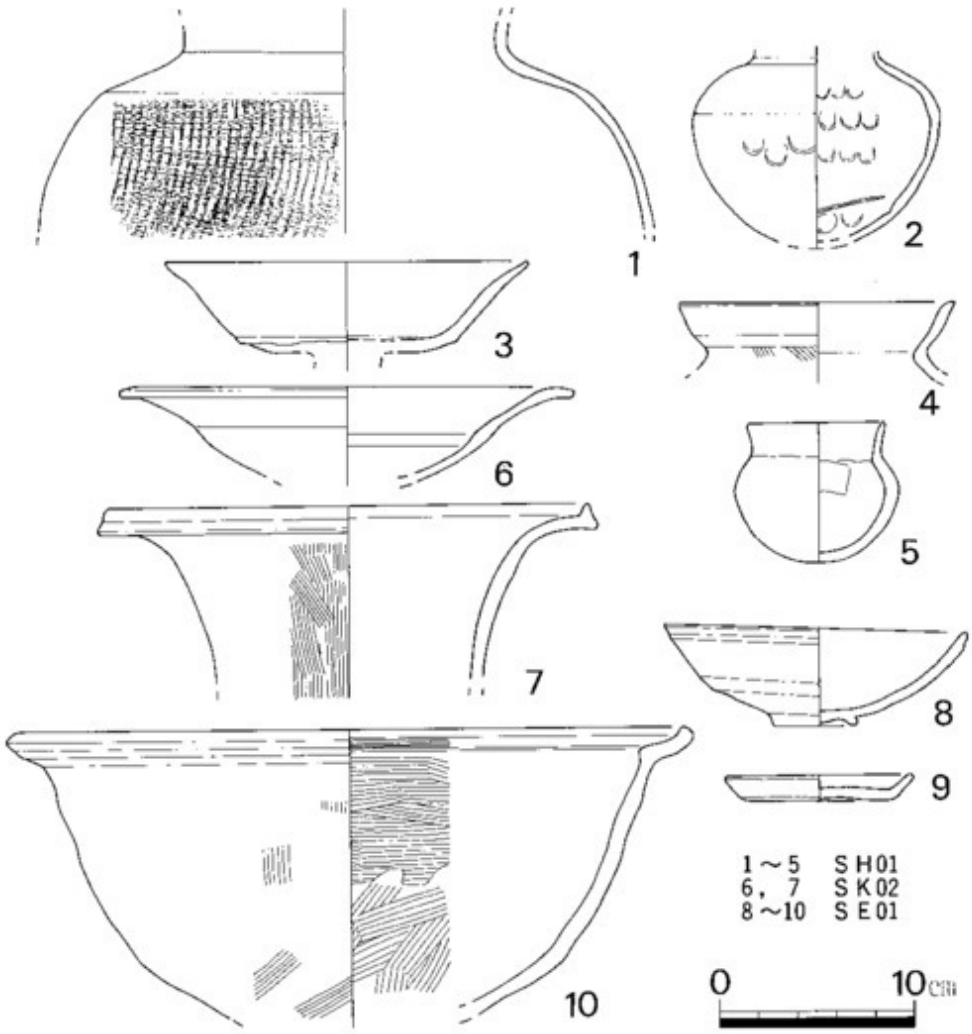
第１図　遺跡周辺地形図

今年度の調査は調査対象地の残り870㎡について行なわれた。この内210㎡のＣ７区では遺構は検出されなかった。薄い土器包含層の堆積も見られたが，周辺でも遺構はほとんど検出されておらず遺物の出土も少なかった。

660㎡のＧ１南区では現在の家屋の下にすぐ東を流れる古川がはこんできた厚さ約１ｍの砂が堆積していたが，その下で中世及び弥生時代から古墳時代の遺構が検出された。中世のものは井戸と考えられる径約３ｍ，深さ0.8ｍの土坑（ＳＥ01）のみであったが，100ｍほど東に中世の集落があることからそれと関係があるのかもしれない。古墳時代の遺構はこれまで東端のＡ区で６世紀後半の溝数条を検出したのみであったが，Ｇ１南区で４世紀後半から５世紀前半の竪穴住居２棟を検出した。いづれも調査区外にはみ出ており全容はつかめないが，一辺約５ｍの方形のものと思われる。川の流れによるのかその当時の地表面より数十cm削られているようで深さも20cmしかない。しかし，床面の上から土師器と一緒に陶質土器と韓式系土器が出土しており，貴重な成果を得ることができた。韓式系土器は県下では今まで数例の採集例しか知られておらず，明らかな遺構から出土した例は本遺跡が初めてである。陶質土器は短頸の壺形で外面はナデ調整，内面には多くの指頭圧痕が残っている。一方，韓式系土器は甕形で外面に格子目の叩き，内面に丁寧な横ナデを施している。出土の意義については今後整理を進めていく上で明らかにしていきたいが，遺跡の南３kmに三谷三郎窯跡（県内最古段階の須恵器窯，５世紀前半）もあり，この窯跡で須恵器製作に携わった集団との関係も考え合わせて行っていかねばならないだろう。また，弥生時代の小さな土坑（ＳＫ02）が１つ検出されており，中から多量の土器が出土したが，遺構の性格等は不明である。



第2図　　G I 南区遺構平面図



第3図　遺物実測図

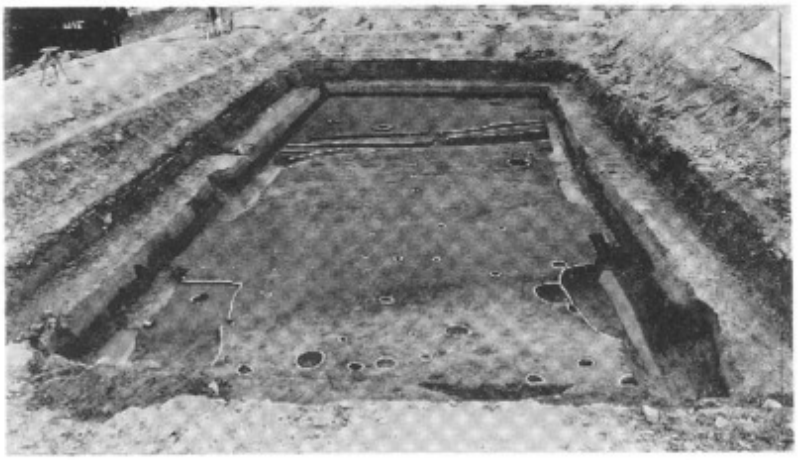


写真１
Ｇ１南区全景
左手前に見えるのがＳＨ02。ＳＨ01は中央手前にそれと並んで建てられていた。

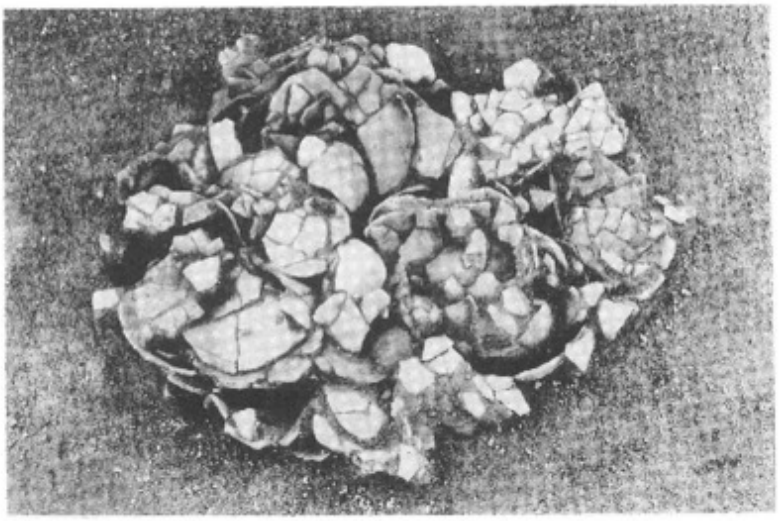


写真２
ＳＫ02土器出土状況
（Ｇ１南区）
弥生時代後期の土坑である。性格不明だが土器を捨てた穴か。

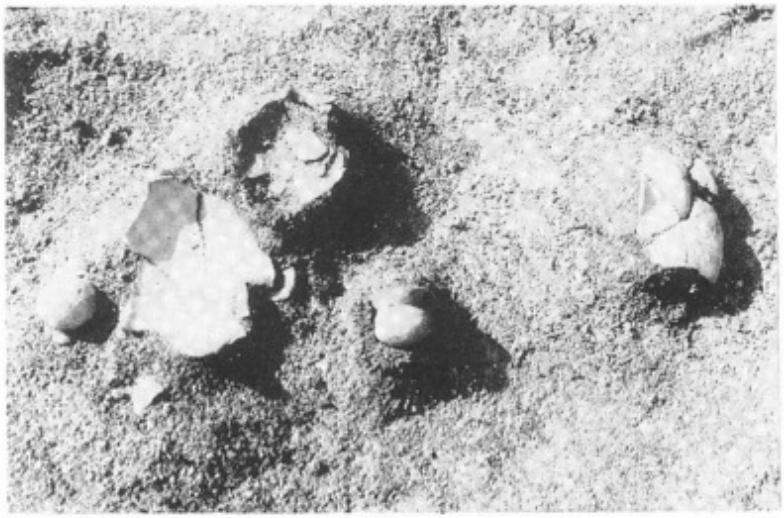


写真３
ＳＨ01土器出土状況
写真４（下）　（Ｇ１南区）
韓式系土器出土状況
住居床面より土師器とともに出土した。

前田東・中村遺跡

1．はじめに

前田東・中村遺跡の所在する前田東町は高松市の東部にあり三木町と接している。遺跡周辺は，北東にある平尾山とそこから南西に伸びる芳岡山との間にはさまれた扇状地形をなしており，新川に向けて南西に下る土地のうえに水田や葡萄畑の営まれる田園地帯である。遺跡の北側には奈良時代の古瓦を出土する宝寿寺跡や中世の前田城跡が存在し，古くから開けた地であったことを窺わせる。今年度で4年目を迎える前田東・中村遺跡の調査は，C～E区を対象にして行なわれた。

第1図　遺跡周辺地形図

2．遺構・遺物について

イ）C5区　　弥生時代後期から平安時代にかけての遺構が存在した。北部で検出された太い溝は奈良時代から平安時代の土器を出土し長期間にわたって使用されていたことを窺わせる。この溝は10mほど東で直角に折れ曲がり南に伸びていくことがこれまでの調査で判明している。一方，南部では多数のピットが検出され，数棟の掘立柱建物が建っていたことが明らかになった。ピット内の土器の時期や位置関係から先述の溝は掘立柱建物よりなる建物群の北と東の境を示していると考えられる。また，溝の傍には井戸が2基掘られていた。いづれの井戸も当時の地表面より50cm程度しか掘り込まれておらず，現在同様この付近の水位が高かったことが考えられる。弥生時代の遺構は溝2条のみであるが共に径15mほどの円形を描いている。円形周溝墓とも考えたが，昨年度西のA区で調査された方形周溝墓に比べて溝の深さは浅い。また主体部にあたるものも検出されなかった。その他の区画溝であったとしても円形の内側で竪穴住居や掘立柱建物の跡も検出されていない。いづれにしても，後世かなりの土地の削平を受けていることになるがその性格については更に検討を加えていきたい。C5区では，弥生土器や土師器，黒色土器，瓦器，須恵器，緑釉土器，青磁，瓦などが出土した。中には軒丸瓦や円面硯，墨書土器などの遺物も存在する。

ロ）D区　　D区には遺構面が2面存在する。上の第1面は平安時代から中近世までのものであり，第2面は縄文時代から弥生時代のものである。第1面では掘立柱建物4棟と溝が検出された。まばらに建てられており，必ずしも同一時期に存在したとはいえないが，時期のわかるD2区のSB01は室町時代頃と考えられる。この建物のまわりは溝で区画されるように囲まれており，中近世の屋敷地の在り方を考えてゆく上での1つの資料となろう。D3区が近代の水田化の際に

大きく削平されており，溝の続きなど南側の状況は不明である。また，鎌倉時代頃に埋まった川の跡が検出されたが，その中から多量の瓦や五輪塔の石材が出土した。五輪塔の笠の１つは西側の溝（ＳＤ01）掘削時に掘り出されて，その溝を渡るときの踏み石に再利用されていたようである。第２面では竪穴住居や柵，溝，川の跡などが見つかったが，居住域は地形的に最も高いＤ２区の付近にあり，Ｄ区一帯は弥生時代には時期ごとに流路を変えながら川が流れていたようである。このような状況の中，Ｄ２・３区のＳＤ12は川と人間との関わり合いを考える上での一つのデータを提供してくれた。ＳＤ12はＤ２区でＳＲ01につながっており，溝の底の高低差よりＳＲ01より取り入れた水を南の調査対象地外に導く役割を負っていたことが考えられる。ＳＤ12は最上部から弥生時代後期の土器が密集して出土しており，埋没して使えなくなる直前に大量の土器が捨てられていたことがわかる。ＳＲ01がやがて埋まってしまったことと関係があるとすれば，川を自分たちの思うように利用しながらも，川の流れが変わると時には集落の移動さえ余儀なくされる当時の人々の生活環境や技術的限界を示しているのかもしれない。第２面の下部では縄文時代後期の川や時期不明の柵列などが検出された。川の上をおおう土の中には土器が含まれず，この時期の遺構は他にはほとんどなかったものと考えられる。

ハ）Ｅ区　　小面積の調査区２つを調査した。いづれも２つの遺構面が存在した。Ｅ６区第１面で検出したＳＢ01は古代の建物で大形の掘り形の柱穴をもつ。

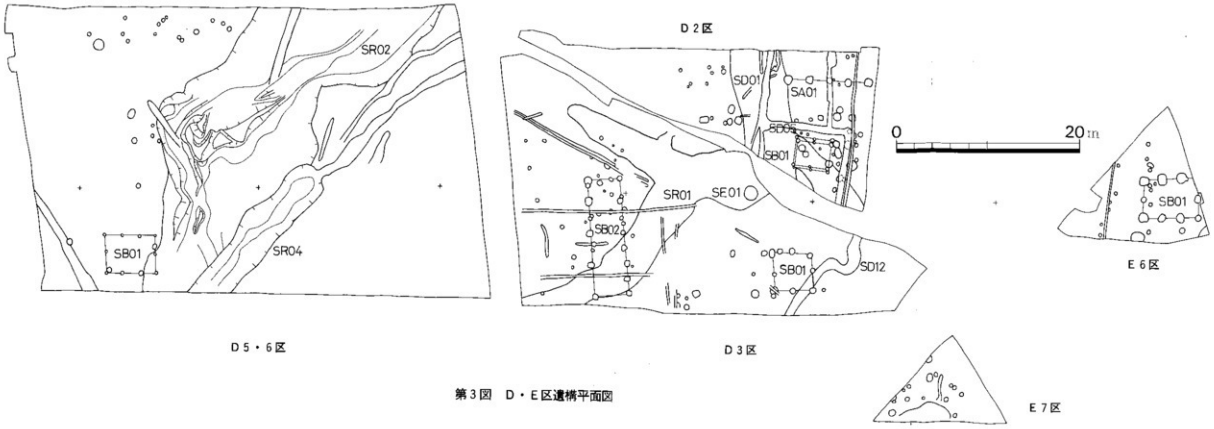
３．まとめ

今年で前田東・中村遺跡の調査は一部を残してほぼ全域の調査を終了した。Ｃ区ではこれまでの成果と符合する形でＣ５区の調査結果が得られたが，これはＣ２拡張区～Ｃ５区にかけて見られる掘立柱建物群からなる集落の中心部が調査対象地の南部に広がるであろうという推測を強めることとなった。これまでの調査で帯金具や軒丸瓦，硯，墨書土器，緑釉陶器等が出土していることから，この建物群が古代律令制の中で官衙的な役割をはたしていたであろうことも考えられるが，Ｅ区を中心として広がるもう１つの同時代の集落との関係もあわせて今後整理を進めていかねばならないだろう。

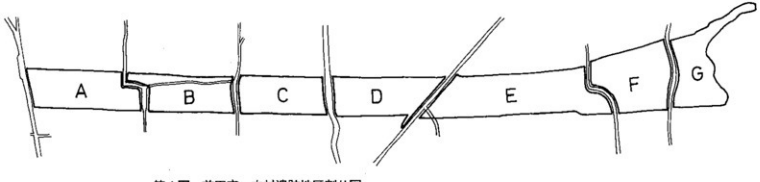
Ｄ区はこれまでＤ１区が調査されたのみであったが，そのＤ１区の遺構密度が高かったことや現地形よりなだらかに北東から南西に広がる旧地形が推測されることからＤ１区から続く集落が存在するかと期待された。しかし，予備調査の結果どおり旧河道の地域であり，そのため土地状況が悪かったのか遺構密度は低く，河道が埋没してなくなった古代～近世にかけて漸く居住域として使われ始めたようである。

最後になったが，今年度の成果のひとつとして縄文時代後期の旧河道から多量の縄文土器が出土したことがあげられる。高松平野部においてはこれまでこの時期の遺構は検出されたことがなく，旧河道といえども土器が出土したということは調査対象地の北側に集落が存在したと考えられ，今後中讃地域の縄文時代を考えていく上で非常に重要なものを提供したといえよう。

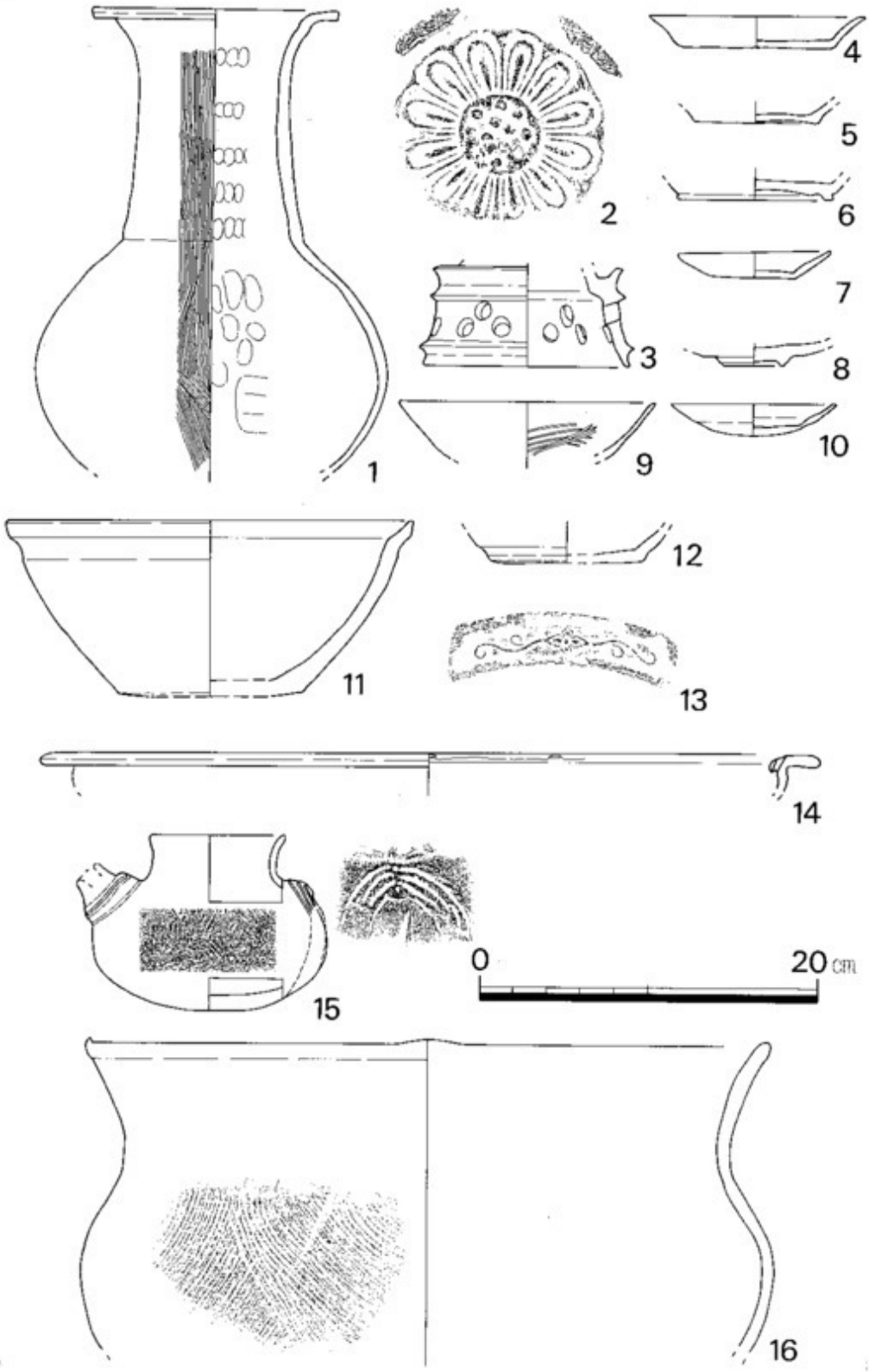
第２区　Ｃ５区遺構平面図



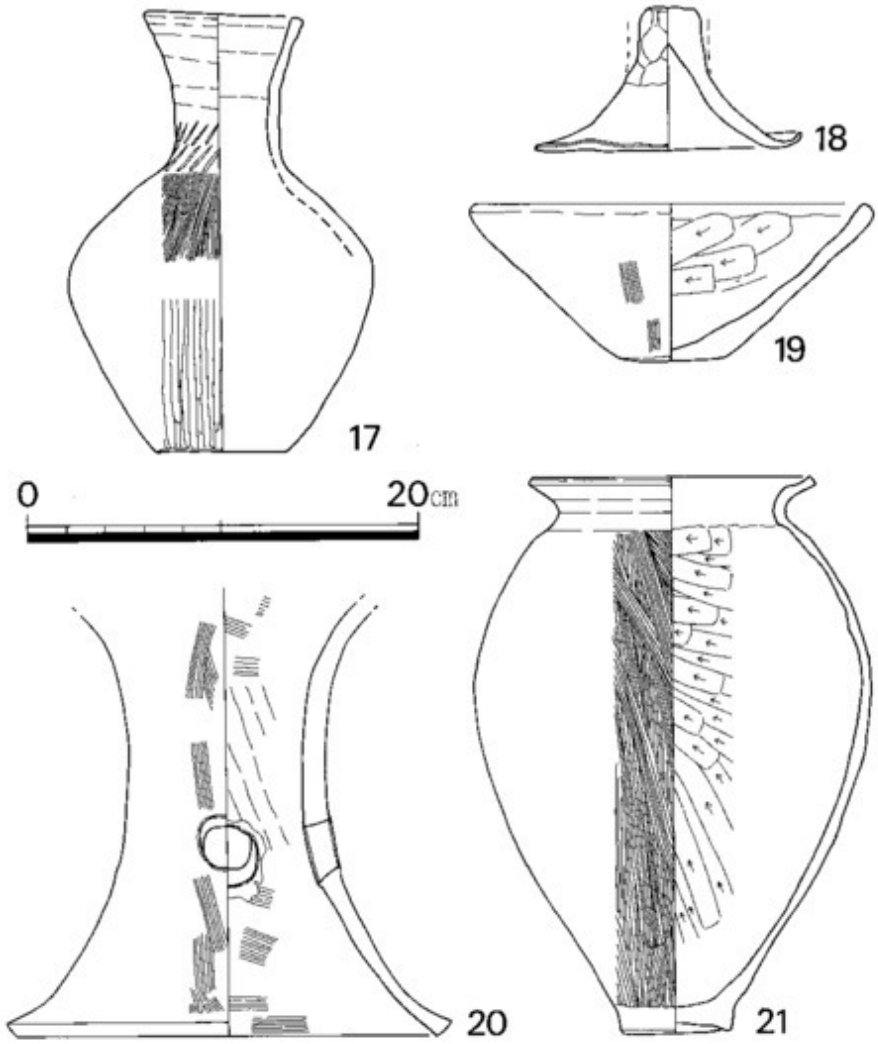
第3図　D・E区遺構平面図



第4図　前田東・中村遺跡地区割り図



第5図　遺物実測図



第6図　遺物実測図

No	地　区	出土遺構	種　類	No	地　区	出土遺構	種　類
1	C 5	S D100	弥生土器	12	C 5	S E01	須恵器
2	C 5	S D95	軒丸瓦	13	D 2	S D01	軒平瓦
3	C 5	S D95	須恵器	14	D 2	S D05	土師器
4	C 5	S D95	須恵器	15	D 5・6	S R02	縄文土器
5	C 5	S D95	須恵器	16	D 5・6	S R02	縄文土器
6	C 5	S D95	須恵器	17	D 3	S R01	弥生土器
7	C 5	S D101	土師器	18	D 3	S R01	弥生土器
8	C 5	包含層	緑釉陶器	19	D 3	S R01	弥生土器
9	C 5	S D97	土師器	20	D 3	S D12	弥生土器
10	C 5	S D97	土師器	21	D 3	S D12	弥生土器
11	C 5	S E01	須恵器				

第1表　掲載土器一覧

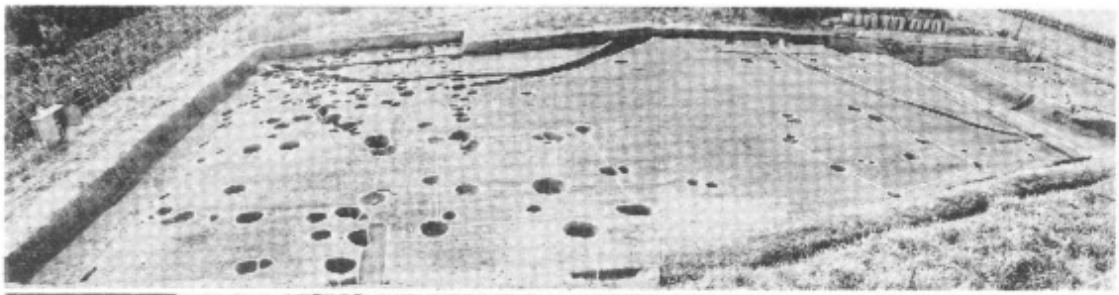


写真1（上）
C5区全景
左側に掘立柱建物群，右奥に溝がある。

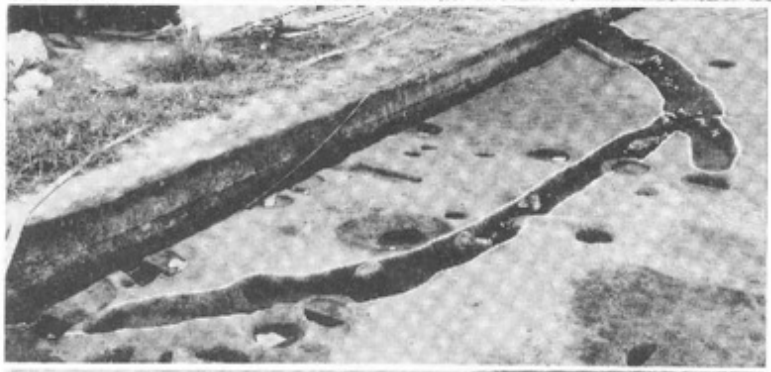


写真2
弥生時代の円形の溝（C5区）

写真3
写真2の溝内の土器出土状況

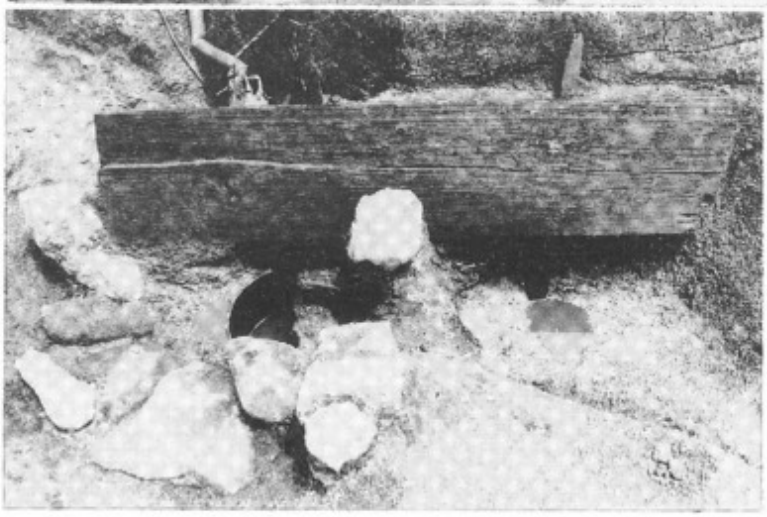


写真4
井戸（SE01，C5区）
地中に井筒を埋め上流側に水を塞き止めるような形で横板を2枚立てている。

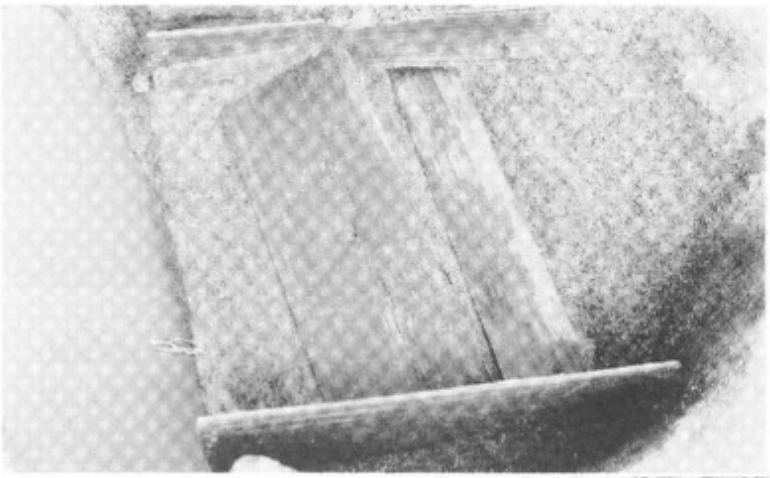
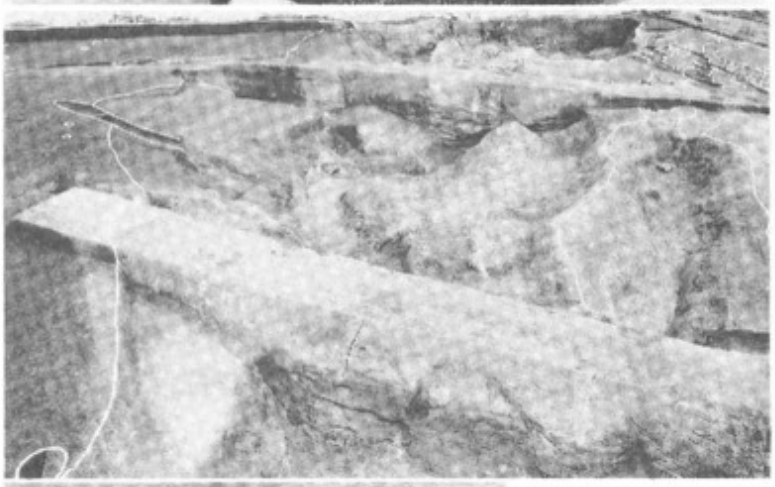


写真5
井戸（ＳＥ02，Ｃ5区）
地面から深さ50cm程の穴を掘り横板を4枚方形に置いていたらしい。倒れた板の下には支えの小さな杭を打っていた。



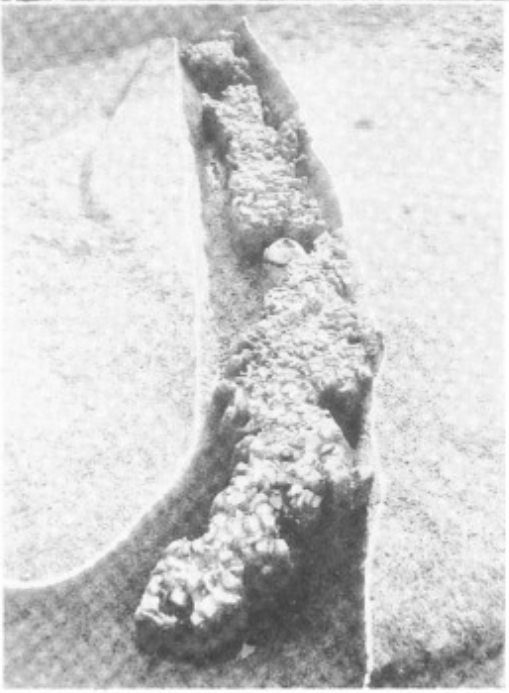


写真6（左上）
縄文時代から弥生時代の川跡（Ｄ5・6区）
中央に2つの土層観察用の畦を残している。北東から南西の方向に流れる川は縄文時代後期から弥生時代後期の幾つかの流路が重なりあっている。注口土器は縄文時代後期の川底から出土した。

写真7（右上）
注口土器出土状況

写真8
ＳＤ12土器出土状況（Ｄ3区）
最上部より多量の土器が出土した。溝が埋まる直前に捨てたらしい。

写真 9
川跡と掘立柱建物（D 3 区）
弥生時代の川が埋まった後に掘立柱建物が建てられている。

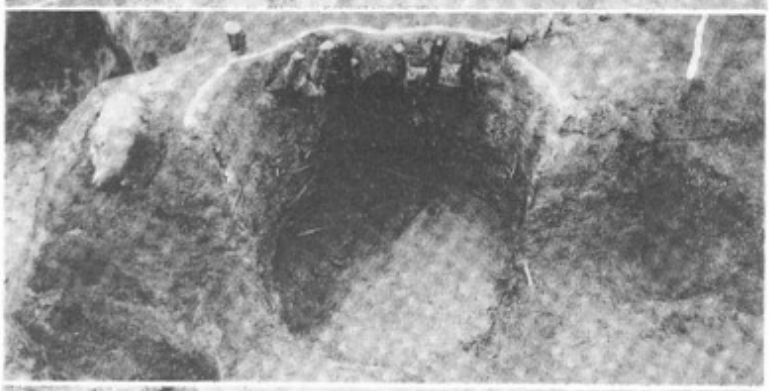


写真10
井戸（D 3 区）
竹で編んだ編み籠状のものであり，めずらしい形態である。時期不明。

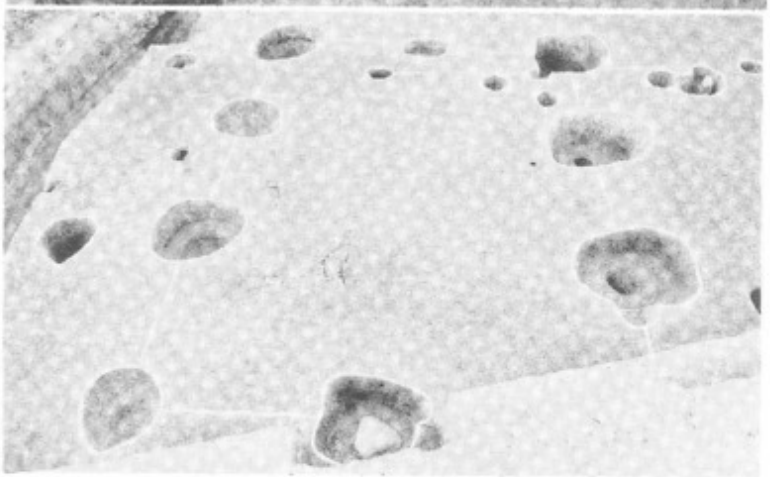


写真11
掘立柱建物（E 6 区）

写真12
作業風景

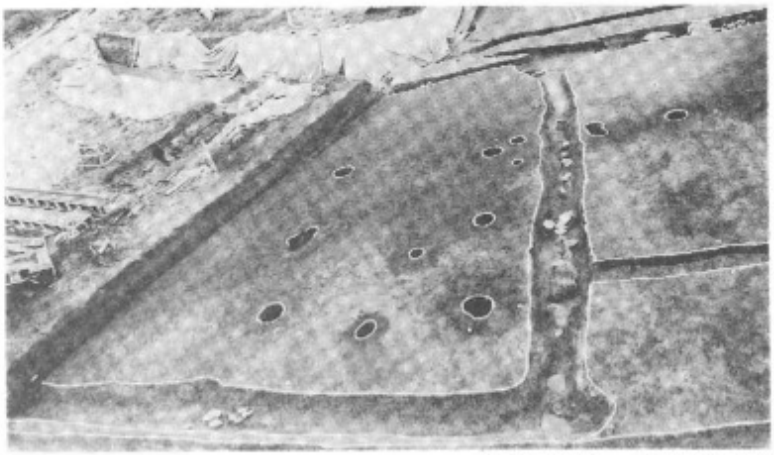


写真13
方形区画の溝と掘立柱建物
（D 2区）

写真14
溝(写真 5 の奥に見える)内出土の軒平瓦と五輪塔の笠
五輪塔の笠は逆さに平らに置かれていた。

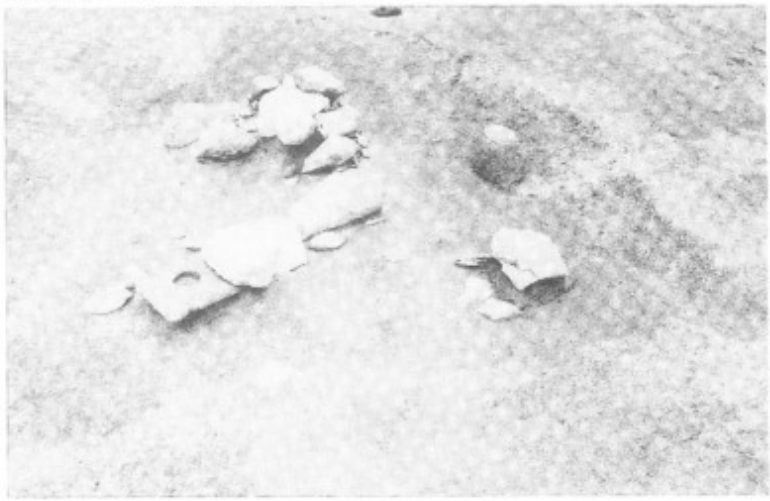


写真15
五輪塔出土状況
鎌倉時代の川跡より出土した五輪塔の石材

鴨部・川田遺跡

1　はじめに

鴨部川田遺跡は香川県東部の大川郡志度町鴨部字川田・秋友に所在する。志度町鴨部地区は鴨部川下流域にあって，周囲を100～200mの低丘陵に囲まれた東西２km，南北0.5kmの小盆地状の地形をなす。

本遺跡はこの地区の南西端にあって周囲の標高は９m前後を測る。すぐ西側を山裾に沿って北流する鴨部川は著名な天井川で近年に至るまで幾度かの氾濫を繰り返し，流域一帯に厚い洪水堆積物が広がる。

周囲の丘陵には古墳時代前期に属する小規模な群集墳が知られるが，この地域を基盤とした首長墓系列は確認できない。また後期古墳も希薄である。弥生時代中期以降の集落は丘陵上と裾部に若干数が知られるのみで平地部における遺跡分布はいまなお定かではない。

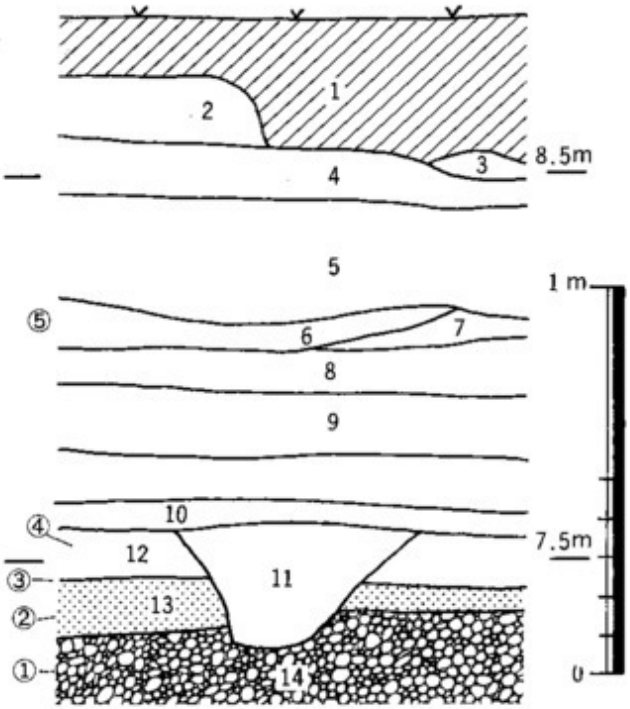
第１図　遺跡位置図

2　基本層序について

① 弥生時代前期遺構検出面

現地表下1.5～1.8m，標高7.2m前後で確認している。調査区西端鴨部川寄りの部分がもっとも高く，東に向かってわずかに下降し東端では約0.4m前後低くなる。また遺構検出面は粘土，シルト，細砂，砂礫と局部的に構成物が異なり一様ではない。

② 遺構検出面直上には暗褐色粘質土を主体とする弥生前期～中期初頭の遺物包含層を認める。なお一部の遺構は本層中より切り込まれている可能性があるが，調査では確証をつかみ得なかった。



第２図　２区土層断面図

③　遺物包含層上面で6世紀後半代の須恵器若干量を検出した。また，後述するように弥生時代後期土器とナスビ形又鍬を出土した4区の沼状遺構はこの面で形成されている。

④　暗青灰色のシルト質土が10～20cm堆積する。ごくわずかの弥生土器が混入する程度で包含遺物からは時期を決しがたい。ただし，本層上面より12c後半代の溝が穿たれていることから，下限を押さえることができる。

⑤　これより上位層は粗砂を主体とする堆積物からなり，その間に中あるいは細砂まれにはシルト質土の薄層が介在する。全般的に下位の諸層に比して堆積物の粒径が大きい。

鴨部川田遺跡における弥生時代前期以降の1.5～2mに達する堆積層の上位4／5は古くとも平安時代末以降の比較的新しい時期のものでこの部分は明瞭に下位の堆積物の土質とは異なる。この時期を境に遺跡周辺の環境の変化を想定できるかもしれない。

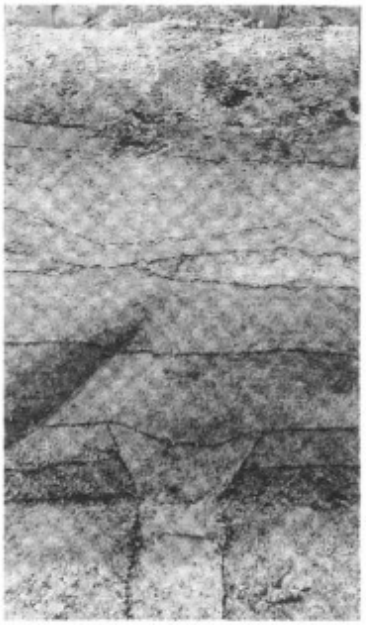
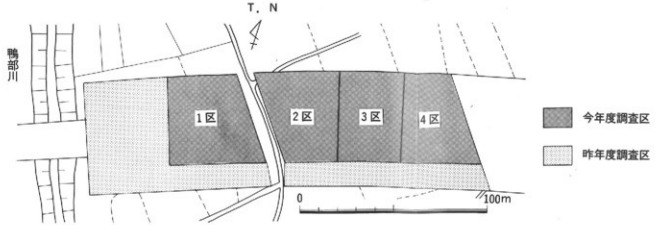


写真1　2区土層断面

第3図　I区遺構配置図



第4図　2・3・4区遺構配置図

3　調査の概略

今年度調査では昨年度調査で確認した弥生時代前期集落にともなう環濠南端部に続き，集落中心部をとりまく環濠の大半とその周囲に展開する遺構群を確認し，多量の前期土器および未製品を含む農具その外の木製品，磨製石斧類各種，石包丁各種等豊富な石器群などを検出した。

このほか弥生後期・古墳時代後期・平安時代末等の資料若干がある。前二者では少量の遺物を見るのみだが，付近にこの時期の遺構の存在を想定できる。後者では本地区の現存方格地割りにほぼ合致する方向の溝などがある。以下では主に弥生時代前期資料を紹介する。

4　集落形態（第3・4図）

弥生前期集落は南西－北東を主軸とする五角形状ないしは卵形に近い環濠（主軸方向長70m以上，同直交方向長60m弱）の内外に展開する。少数の中期初頭に下る遺構を含むが，内外地区とも前期後葉を中心とする。環濠内外では遺構分布密度および種別が顕著に異なり，外方でも環濠底辺部分に隣接する調査区南西部と，南側面に接する調査区南東部ではやはり様相が異なる。

環濠内部では竪穴住居と断定し得る遺構はないものの，おびただしい数の柱穴群をはじめとする各種遺構が密集し重複も著しい。この中には炭・灰や炭化した堅果類など生活残滓を伴う多数の土坑や区画あるいは排水施設と思われる小溝も多い。柱穴の多くはなんらかの建物遺構を構成すると思われるが現段階では十分復元し得ていない。また出土遺物の種類と量はこの地区に限定された特殊な機能を想定するよりも日常的な消費生活と各種作業の場であったことを示している。したがって環濠内部は居住域の中心部分であり，竪穴住居は見ないものの，柱穴列によって示される建物遺構のなかにそれに代替する機能を想定すべきである。

環濠外方南東部は相対的に遺構密度が希薄である。しかし，この地区にも同時期の円形柱穴列および長方形柱穴列からなる建物遺構が分布する点は注意すべきである。他には性格不明の竪穴遺構群4群と少数の皿状土坑が散在的に分布する。

環濠外方南西部でも不明竪穴遺構2群と円形・楕円形柱穴列数群を確認している。また，方形あるいは楕円形にめぐる区画溝を複数単位認める。1例では内部に楕円形柱穴列が存在する。

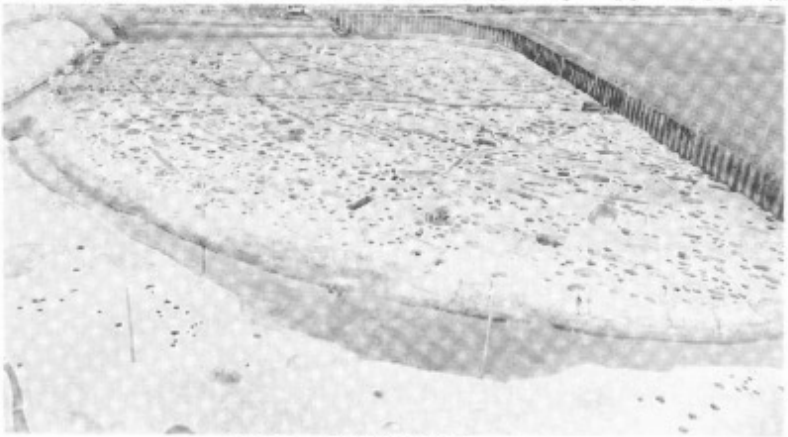


写真2　環濠内部全景

居住施設と木工その他の作業施設あるいは貯蔵施設の特定および分布の確認は今後の課題である。また，本集落に伴う墓域は調査対象区域には認められない。

5　環濠

環濠の幅と深さは地点によってかなり異なる。最も広い部分で幅6.5m，深さ1.6m，狭い部分では幅2.5m，深さ1.2mを測る。断面形態は概ね逆台形状であるがこれも部位によって異なる。また底面も局部的に深く抉られた部分があるなど凹凸が顕著で，通常の取・排水路機能をもった溝状遺構の様相とは異なる。

写真3　環濠断面

環壕内外側ともに明瞭な土塁状の施設は認めがたいが，一部の地点では環濠埋土中に，内肩部より流入した状態の地山類似土の堆積を明瞭に認めた。環濠掘削土の一部を内側に盛った痕跡かもしれない。また環濠東部では内肩部で小規模な柱穴群が帯状に分布するのを認める。関連する柵状施設の可能性がある。この他架橋施設などは確認していない。

写真4　環濠遺物出土状態

遺物からみて弥生前期後葉に掘削し，前期のうちに埋没が進行し，中期初頭にはほぼ完了したと判断できる。

6　円形柱穴列

環濠内外で多数の柱穴を検出しているがこの中には5，6基から10基の柱穴群が一定の間隔を以て円形に配列されたものがある。なんらかの建物遺構の痕跡と推定できる。しかし検出面の状況から後の削平を想定しがたいにもかかわらず，まず第一に竪穴状の掘り込みは伴わない。また炉あるいは壁溝等の通有の住居遺構に見られる諸施設も確認できないので，住居とみなすには慎重とならざるをえない。このような遺構は環濠内外に分布する。

写真5　円形柱穴列

7　楕円形柱穴列

上記の円形柱穴列に類似するが，同様の柱穴群が楕円形に配列された遺構である。やはり建物遺構の一種であろう。しかし同じように竪穴状掘りこみ・炉・壁溝などの施設は伴わない。環濠

外方西南部で検出した。この例では長径7.8m，短径3.6mを測る。興味深いことに柱穴群の外方で1m内外の間隔を以て小溝群が東西南の3方を囲む。周囲の溝の出土遺物は，種類・量ともに際立った点はない。

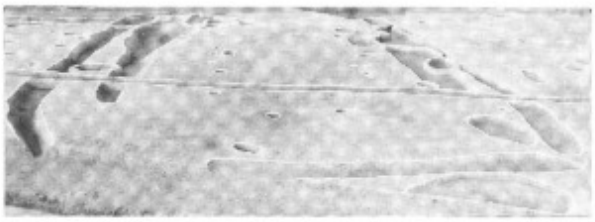


写真6　楕円形柱穴列

8　長方形柱穴列

6基の柱穴からなり，長3.3m，幅2.4mで2間×1間の配置を持つ。東南隅の柱穴では柱材の基部と考えられる一辺12cm程度のミカン割り材が遺存していた。他種類の柱穴列同様に炉その他の施設は伴わない。この種の建物遺構は通常倉庫もしくは作業施設と判断されることが多いが現時点では平地建物か高床建物かの識別をする材料すら十分ではない。ましてや機能推定は困難である。今のところ，環濠外方東部に単独で立地する1基を確認している。

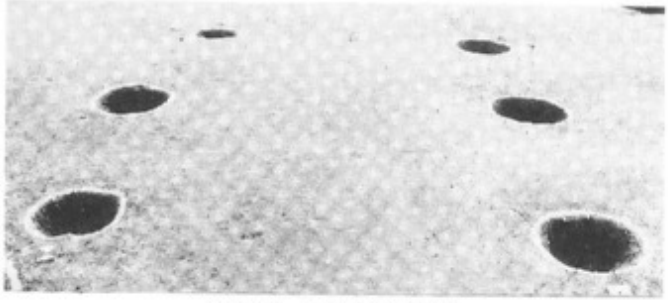


写真7　長方形柱穴列

9　竪穴遺構

環濠外方東南部で4群36基，同西南部で2群10基以上，環濠内部で6基の竪穴遺構を確認している。これらは平面形が不整円形から卵形を呈し，規模は径3m前後から6m以上と一様ではない。深さも5cm内外から10cm以上と差が大きい。数基程度が1群をなし重複する傾向がある。床面はあまり平坦ではなく中央に向かってゆるく凹む。直上および埋土中に若干の炭片などを見る場合もあるがしばしば竪穴住居床面上に見る生活堆積ほど顕著ではない。また湧水層まで掘り下げている例もあり，2，3の例では床面に木片が遺存していた。以上の所見に加え，上屋構造物を支える柱の痕跡が竪穴内に限らず外部でも認められないこと，炉その他の焼成施設の痕跡がまったく認められないことなどから竪穴住居とはみなしがたいと考えている。

写真8　竪穴遺構

時期は前期後葉に主体があり，ごく一部は前期末ないし中期初頭に下る。

10　土坑

全体で300基を越える土坑は一律に捉えがたい。この中には平面長方形か長楕円形で断面箱形を呈するかなり規格的な一群がある。内部に炭・灰・堅果類等，生活残滓を多く含む傾向があり環濠内部に集中的に認める。この地区の機能を推定する上で重要な指標となるであろう。

11　出土土器について

弥生前期後葉に比定し得る資料が圧倒的大多数を占める。細かいセット関係を検討し得る段階にないのでここでは該期の様相を概観するにとどめる。なおこの他少数の中期土器および微量の弥生後期後半・古墳時代後期および平安時代末の資料がある。

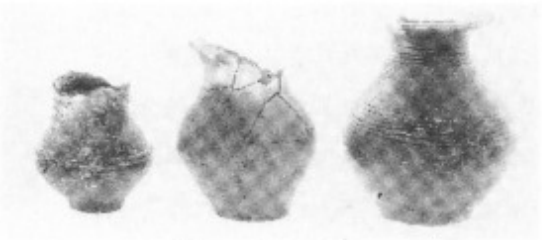


写真9　壺形土器

壺は大中小の3種からなり大形品では口縁部が大きく発達し頸部・体部上半に篦描平行沈線，突帯からなる施文が顕著なタイプが多く，一部は口縁部内面に刻み目突帯を貼る例がある。中・小形品では大形品同様の形態を持つもの，逆に口縁部の発達が弱くむしろ体部に長胴化の兆しが認められ文様が貧弱なタイプ，および両者の中間的形態で頸部および体部最大径付近に比較的単純な施文を認めるタイプとがある。しかし法量の差に比べ形態差はあまり顕著でなく中期段階に発達する無頸壺は見ない。

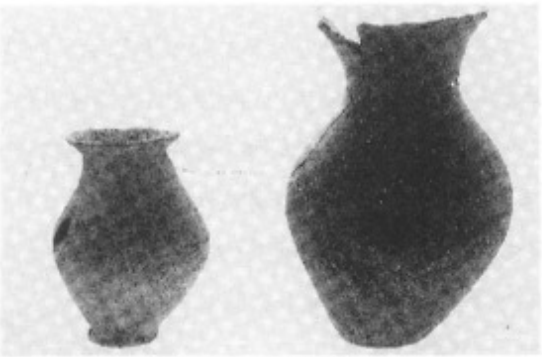


写真10　壺形土器

甕では逆L字形口縁を有する形態が大多数を占めるが，如意状口縁も認めることができる。また前期前半段階に残る突帯文深鉢系の形態は認めない。口縁部直下の篦描沈線の条数は，2～3条から10条以上まであり，列点文などは多くない。また無文となるものも一定量存在する。外面調整はハケ調整が主流である。

写真11　甕形土器

鉢では甕と同様の逆L字形口縁を持ち，口縁部直下に横長の把手を2箇所以上付す大形品と単純な鉢形態の小形品とがある。

埋土最上層資料の一部を除く環濠資料と内外の遺構の大多数の出土土器は上記の様相を示すが，環濠最上層資料の一部と若干数の遺構では櫛描沈線文を有する逆L字口縁甕や肩部を櫛描沈線および列点文で加飾した壺等を認める。これらの少数資料は中期初頭に下る可能性がある。

12　土偶

頭部以下を欠損した人頭部造形で残存全長11cm，顔面部長6.6cm，幅6.7cm，奥行7.2cmを測る。中実の土製品で顔面・耳の一部と鼻頂が剝落する。全体形状は立体的かつ写実的であるが顔面は概ね平坦面で鼻梁のみ顕著に隆起する。目・口は篦状の工具でやや粗雑に穿つ。鼻梁は丁寧に摘み上げ，鼻孔も表現する。両耳は簡単に摘み出し，各々縦二ヶ所に穿孔か抉りがある。両眼下の

筐描き二重弧線，口元の二重圏線は入墨表現と推定できる。頭部中央，縦方向の隆起は頭髪表現の可能性がある。また赤色顔料を塗布した痕跡がある。耳朶の穿孔と入墨表現の構成は東日本の縄文時代晩期から弥生時代中期の人面表現の様式に共通する要素である。

13　出土石器について

調査終了後，現時点までに水洗作業を終えた出土遺物総量の約７割を対象に石器類の抽出・分類作業を行なった。その結果は第１表に提示したとおりである。あくまでも中間的な集計であるので，各器種の厳密な数値は今後変動する恐れがあるが，石器組成の大要および構成比はこれによってほぼ把握できると考える。なお，同表は主要器種に限定したため，削器類，楔形石器，磨石，砥石および石核類などについては存在するがここでは省略している。

農具	石鏃 A	2		21 (3.2)	156 (23.4)
	石鏃 B	19			
	打製石斧 A	17 (37)	46	135 (20.2)	
	〃 B	7 (15.2)			
	〃 C	22 (47.8)			
	磨製石斧 A	21 (23.6)	89		
	〃 B	68 (76.4)			
	磨製石斧 未製品	63			
工具	太形蛤刃石斧	52		100 (15)	171 (25.6)
	柱状片刃石斧 大	16	33		
	〃 小	17			
	扁平片刃石斧 大	3	7		
	〃 小	4			
	円盤状石器	8			
	石錐	71		(10.6)	
武器・狩猟	石鏃	336		(50.3)	338 (50.7)
	磨製石鏃	1		(0.2)	
	骨鏃 未成品	1		(0.2)	
他	石錘	2		(0.3)	

注1　数値は個数，括弧内は構成比(%)を示す。
注2　A：有茎鏃　B：凹基鏃　C：サヌカイト　磨製石斧工程製品はすべてB　片刃石斧はすべて石材A
注3　本調査1991年度調査数値(668)の構成比である。1992年1月末までに本表・分類作業を終えた調査土量(668)の約7割に対する集計である。
　　欠損部位は1～4は完全品，2は基部，3，4は遺存である。

第１表　鴨部川田遺跡1991年度調査区
石器主要器種組成表

使用石材は磨製品では片岩系と石鏃同様の粗悪な安山岩か凝灰岩系等，打製品では磨製と同じ２種とサヌカイトを認める。複数産地からの搬入を想定できる。

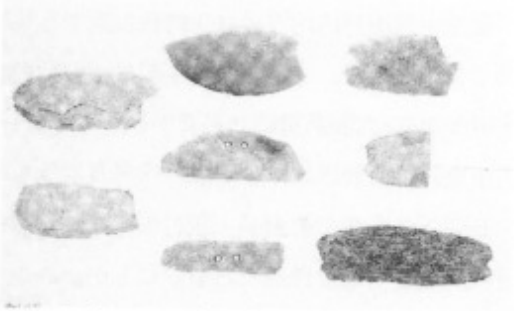


写真12　石庖丁各種および未製品

また63点に及ぶ多量の磨製石包丁未製品を伴う点が注目できる。未製品は全て粗悪な安山岩か凝灰岩系，片岩製未製品は見ない。また粗割り段階・研磨段階・穿孔段階の各工程の未製品および原材と思われる安山岩・凝灰岩礫多数を検出しており，素材獲得から仕上げまでの石包丁製作の全工程が本遺跡で行なわれた可能性が高い。

太形蛤刃石斧　長11.4cm・470g～24.3cm・1370ｇがある。砂岩その他と推定できる。刃部を大きく欠損した破損品が多い。

柱状片刃石斧　長13.5cm，刃部幅2.4cm程度の大形品と長9.8cm，刃部幅0.9cm程度の小形品とが

ある。前者のほとんど全ては基部に抉りを入れる。全て片岩系石材を使用しており，石理にそった方向の破損が目に付く。

扁平片刃石斧　長11cm，刃部幅５cm程度の大形品と長５cm，刃部幅2.7cm程度の小形品とがある。この場合も全て片岩系の石材を使用している。

円柱状両刃石斧　基部径と刃部幅がほとんど変わらず，細身の円柱状を呈する両刃石斧である。刃部幅４cm，長16cm程度である。当該期に類例の乏しい形態である。刃部縁辺が著しくつぶれ鈍化した個体が多いが，太形蛤刃石斧刃部のように大きく欠損する例は少ない。また石材は太形蛤刃石斧や片刃石斧類のように使用石材が均一ではなく，この形態では片岩・砂岩その他が認める。

石錐　確認した石錐は全てサヌカイト製小形の石錐である。大形の礫錐は見ない。板状の基部を有する形態と針状の形態とがある。

石鏃　１点を除いて小形の平基ないしは凹基形態である。２ｇ～10ｇをはかる。15ｇをはかる大形の有柄形態は１点のみ認められる。また未製品若干数をともなう。

写真13　磨製石矛

磨製石矛形石器　サヌカイト製。尖端部を欠損し，残存長20cm，最大幅7.1cmを測る。両面とも中軸部分に明瞭な鎬を形成して断面菱形を呈する。基部の一側縁に方形の小さな抉りを有する。

石器組成上，磨製石斧類の比がかなり高い点に注目できる。磨製石斧類全体だけで15％を占め石錐を含めた工具類全体では25％をこえる。また単に量的に卓越するにとどまらず石斧類では，刃部形態・寸法から最低６種に区分できる器種を認める。このことは本遺跡において木製農具をはじめ，多量の未製品を確認している点と関係があるであろう。

従来中部瀬戸内地方の弥生時代前期では磨製石器類なかんづく石斧類が量・器種構成ともに貧弱であるとされ，当地方の石器組成上の地域色の主要な点とみなされてきた。香川県下において下川津遺跡・大浦浜遺跡などでやはりそのような様相は観察できる。したがって現時点では鴨部・川田遺跡の石器組成は中部瀬戸内地方ではかなり特異なものといえる。

石包丁は多数の未製品・原材の存在から当遺跡での製作は間違いない。また使用される石材は近在で採取可能な種類である。にもかかわらず石包丁製品の４割程度という偶発的とは考えがたい率が複数産地より製品として当遺跡に搬入・使用されている点が注目できる。

14　出土木製品について

今回検出した木製品の圧倒的大多数は環濠より出土し，弥生時代前期後葉に位置付け得る。この他ごく小数，同後期後半および平安時代末に比定できる資料がある。前者は４区沼状遺構から，後者は２区平安溝より出土している。なお同溝の延長部分では昨年度調査で曲物・斎串等を確認している。また少数の柱穴では柱材基部が遺存し，土坑の数例からも木片を得ている。このことは遺跡形成時から現在に到るまでの鴨部・川田遺跡の環境の一面を示している。弥生時代前期資

料の主要器種および点数は第２表に示している。農具類の点数が多いが容器類その他も認める。また多数の未製品をともなう点が注目できる。

農具類では広鍬，狭鍬，諸手鍬，丸鍬および竪杵がある。広鍬は刃部幅17～25cm，全長27～42cmでいずれも刃部厚0.5cm以下の薄手品ばかりである。狭鍬は刃部幅６～９cmを測り，柄装着部ほぞと柄壺は方形である。諸手鍬は強く湾曲し内面に縦長の紡錘形の隆起を持ち柄装着部ほぞは円形で刃部厚は１cm以上と厚い。丸鍬は全て未製品である。竪杵は完存品で全長130～50cmを測る。中央握り部の上下に輪状の隆起を持つ。

工具は石斧柄資料２例がある。両例とも柄と刃部が平行する両刃石斧柄と思われる。

弓は３例がある。うち１例は弓筈部分で上下２箇所に樺皮を巻き，漆で固める。また内面に浅い樋の刳り込みがある。

容器類ではコップ状を呈する鉢形，長方形の浅い皿形，菅笠形を呈する蓋ないしは鉢形，短い把手を一端に付すいわゆる「杓掬い」がある。また鉢形，杓形および高坏形の未製品もある。

不明有刻円盤（写真14）としたものは外径で長径19.5cm，短径17.8cm，内径６cmのややひしゃげた環状を呈する。表裏両面とも同一意匠の文様を持つ。四方に３本一組の細い刻線を放射状に配し，内縁部は幅0.4cmほど狭く突帯状に隆起する。この部分で厚1.2cmを測り外縁にむかって薄くなる。また外縁端には細かい刻み目を認める。

弥生後期の又鍬はいずれも薄い板状を呈し，基部に傘形の突起をもつ，いわゆる「ナスビ形」で刃部は二股をなす。扇子とした資料は折損しており長さは不明であるが幅２cmの薄板４枚の基部に小孔を穿ち，木釘で留めている。

15　木製鍬の製作工程

製作段階の異なる広鍬を中心とした多数の鍬未製品を検出しており，それによって木製鍬の製作工程をある程度推定することができる。

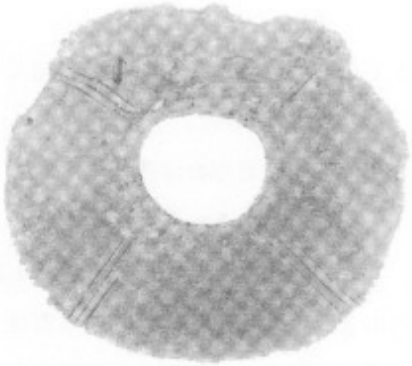


写真14　不明木製有刻円盤

器種	広鍬	狭鍬	諸手鍬	鍬未製品第一工程	広鍬未製品第二工程	広鍬未製品第三工程	広鍬未製品第四工程	広鍬未製品第五区程	諸手鍬未製品第六工程	丸鍬未製品（第三工程）	竪杵	石斧柄	弓	蓋状品	皿	杓掬い	容器未製品	杓未製品	高坏状未製品	不明有刻円盤
点数	20	2	2	2	1	11	1	1	1	2	5	3	3	2	1	2	2	2	1	1

器種	扇子	又鍬
点数	1	5
時期	平安末	弥生後期

第２表　木製品　主要器種一覧表（左：弥生前期　右：その他）

0工程　伐採および枝落とし・分割　0工程製品は未検出であるが，以下の諸工程の前提として当然想定し得る工程である。また次工程以後の製品の規模から考えてこの段階で概ね鍬2枚分長さに分割している可能性が高い。

1工程　原木丸太材の分割　放射状に割り裂きいわゆる「ミカン割り材」を作る。この段階で木芯部を除去しているが樹皮は残す。(写真15)

2工程　前工程製品では両側部（樹皮側と木芯側）の厚さが異なるため，最終的に「柄壺」となる隆起を作り出しつつ厚板材の一面を削り込み，均一的な厚さの板材とする。と同時に鍬一枚分の長さごとに切り込みをいれる。(写真16)

3工程　前工程で作り出した切り込みに従って分割する。(写真17)

4工程　樹皮を剝がし，「柄壺」の形態を整える。(写真18)

5工程　柄壺および刃部の細部加工　基本形態の完成（写真19)

6工程　柄装着部の穿孔。諸手鍬で1例穿孔途上の資料がある。

写真15　木製鍬未製品第1工程

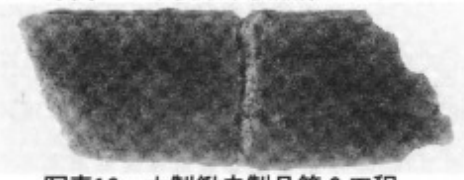


写真16　木製鍬未製品第2工程

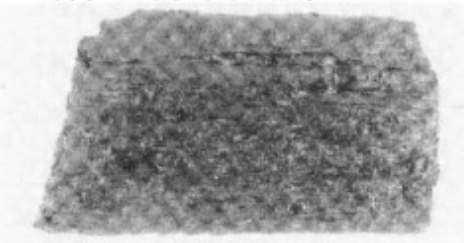


写真17　木製鍬未製品第3工程

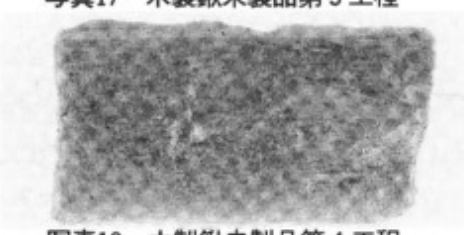


写真18　木製鍬未製品第4工程

写真19　木製鍬未製品第5工程

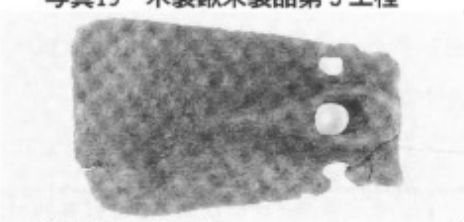


写真20　木製鍬

なお丸鍬未製品3例を見るが，上記広鍬の製作工程の3ないし4工程に相当する資料である。また諸手鍬の未製品は6工程の中途である。

広鍬に限っても14例の未製品を見るが，うち11例までが3工程製品である。また丸鍬未製品3例もすべてこの段階の製品である。3工程終了段階が木製農具製作時の画期と考えられるかもしれない。

従来想定されている弥生時代の木製鍬製作技法では鍬数枚分の長い板材に連続して作り出し，ある程度の形態を作り出したのちに分割仕上する方法が一般的である。本遺跡資料においても1～3工程はそれを示している。しかし他の例に比べ，まだ鍬形態を十分に作り出す以前の早い工程で広鍬・丸鍬ともに分割を行なっている点に特徴がある。

末3号窯跡

末3号窯跡は大川郡志度町末に所在する。付近には他に2基の窯跡の存在が確認されており，あわせて末窯跡群と呼ばれている。末1号窯跡は昭和43年に調査され，全長8.7m，幅2mの本体と広い範囲にわたる灰原が確認された。操業年代は出土した須恵器より7世紀代と考えられている。2号窯跡は須恵器片の採集によりその存在が確認されたが本体は破壊されている。

第1図　遺跡周辺地形図

末3号窯跡は1号窯跡から直線で300mの位置にあり，北の五瀬山より西に派生した尾根末端の東斜面に築かれている。最近の農道造成や畑の開墾等によりかなり破壊されていると考えられたが，調査の結果，窯本体の燃焼部・焼成部の一部及び煙道付近と，溝，土坑等の遺構が検出された。

窯本体は全長6.5m以上，現存の最大幅1.3mの登り窯である。燃焼部と焼成部は上半分を大きく削平されていたが，厚さ10cm程の青灰色の細砂や炭が残されていた。この細砂は須恵器が床にくっつくのを防ぐために焼成部に敷かれるものである。細砂は西に，炭は東に広がっており，この境が燃焼部と焼成部の境であると考えられる。この部分は焚き口より下がってきた床面が煙道に向けて高度をあげはじめる屈曲部でもある。細砂は3層に分けられ，最低3回の窯焚きが行なわれたことを示している。燃焼部と焼成部からは少量の須恵器細片が出土した。

煙道部は煙出し穴より長さ1.2mが残されていた。断面の観察から，煙出し穴の径が20cmであり，操業停止後に天井部がつぶれて落下したことが判明した。この部分の焼成部寄りでは青灰色の細砂が薄く残っていたことから，この近くまで下から土器を並べていた可能性が考えられる。更に煙出し穴寄りの床上で須恵器片2が出土した。また，地山削り出しの床から剝離しかけた窯体が確認された。これは床に粘土を貼って床の一部を作ったものと考えられる。窯本体より出土した須恵器は7世紀前半の時期のものである。

窯以外の遺構では，溝や土坑，ピットが検出された。溝には窯本体の上方を半円形にめぐると考えられるものの他に，窯の右横に掘られた大型の土坑に右上方から流れこむものがある。土坑は径3m，深さ1mの斜面横から掘られたような半切形である。本来の性格は不明であるが，埋土中には須恵器・土師器片や炭，窯体片が含まれており，窯本体からでたゴミを捨てるのにも用いられたようである。

窯本体の下斜面では性格不明の土坑4が検出されたが，その他の生活，生産関連の遺構は検出されなかった。灰原もみられず，更に下の溜め池のなかに存在することが考えられる。

写真 1
灌木伐開後遠景
中央のシートを掛けている部分が窯本体

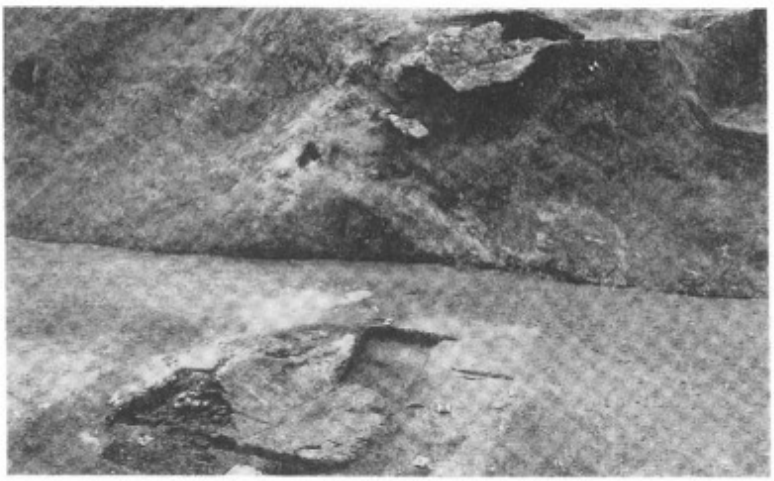


写真 2
窯床面検出状況
中央部は削平されている

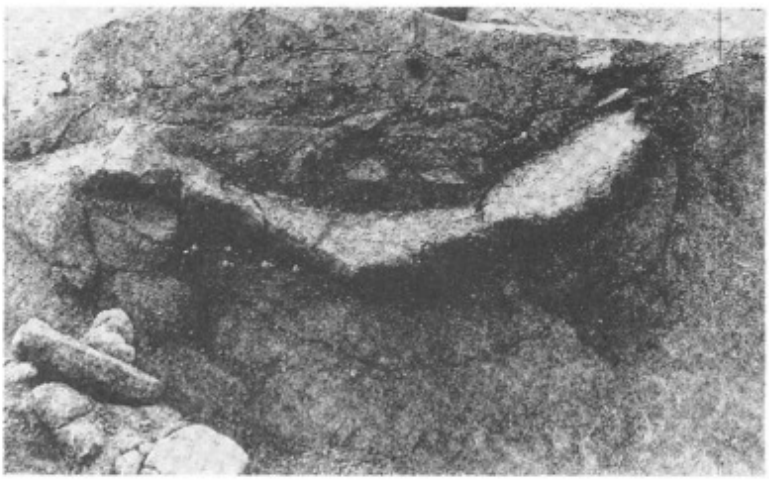


写真 3
煙道部横断面
窯体の天井部が落下している

上天神遺跡

第1図　遺跡位置図

はじめに

上天神遺跡は高松平野中央部で旧香東川東岸の標高16m前後に位置し，有力な前期古墳群の展開する石清尾山山塊から旧香東川を挟んで南東方向約2.5kmにある。遺跡は高松市上天神町から三条町にかけて広がり，御坊川支流の小河川，古川を挟んで東西の微高地群に展開する。

既に昭和62・63年度に今年度調査同様に，国道11号高松東道路建設に伴う発掘調査の一環として古川東岸部分の調査を実施している。その際には，三条池北側部分で掘立柱建物群の卓越する弥生時代後期初頭の集落等を確認している。今年度の調査はこれに引き続き古川西岸部分の一部の調査を行っている。

調査の概要

今年度調査では古川西岸部分で，道路用地北辺部1,900㎡，東西約150m間を対象としている。地形的には古川沿いの低地帯と，西側の微高地群とに別れる。

低地帯は，幅約70m前後で古川を中心にしてそれに沿って両岸に展開する。東西両側の微高地との境界部は明瞭な小崖状の段差を現地表面においても観察しうる。古川西岸部分の対象地においても，この境界部で0.4～5mの比高を認める。低地帯部分は概ね現地表下1.6～2mで比較的緻密な砂礫層に到達する。これより上位は淡灰色～灰褐色のシルト・粗砂等を主体とする古川の堆積物から成る。同層中より時期比定可能な遺物を検出し得なかったが，本来，この位置まで続いていたであろう西側微高地の裾部および斜面部の包含層は完全に削り取られ，その後先述の堆積層が形成されていることから比較的新しい時期の所産と推定できる。後述するように微高地斜面包含層の下限，平安時代前半以降の可能性が高い。

微高地群は調査区中央部で幅10m前後，深さ0.5m程度の比較的小規模な自然流路2条によって三分されている。東側微高地は東半分で時期不詳の小溝3条等を検出している。また東端微高地斜面に前述の遺物包含層が広がる。出土遺物は多くないが弥生時代後期前葉～平安時代前半の資料を含む。調査区中央の小自然流路群は下層に弥生時代前期後半の遺物少量を含み，上層には弥生時代後期前葉～平安時代前半の遺物を小数認める。流路間の部分では遺構はない。

これの西側では，南西方向から微高地を横断して，流路群に注ぎ込む6条の溝を検出した。うち1条は幅約2m，深さ約0.5mを測る比較的大規模な溝で弥生時代前期後半に掘削，短期間で廃絶している。他の溝は遙かに小規模で弥生時代後期前葉に比定できる。

以上今年度調査によって，上天神遺跡のうち，古川西岸では東岸地区とはかなり異なる土地利用の一端が確認できた。なおこの地区の調査は次年度に継続する。

写真１　調査区全景　東から

写真２　作業風景　西から

国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
平成３年度

平成４年３月31日

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷　セキ株式会社